

「教育方法論に期待されること」と半年の授業による学生の意識の変化

～学生のレポート（アンケート）の内容の変化から～

法政大学小金井キャンパス兼任講師 藤牧 朗

要旨

はじめに、教員として教育活動に携わっていくために、教員の協働性（同僚性）と生徒とのかかわりを考えて、対話の重要性を考慮して、「哲学対話」の手法を用いて授業を進めていった。そのうえで、自分自身が学んできた方法、すなわち自分自身が身につけている方法を用いて指導をしようとしてしまうことに着目した。また、アンケートを実施し、その結果も参考にした上で、学生の学びたい内容を組み込んで、学生が学んだことを活かせるように、さらに使ってその価値を感じられるように意識して、「入れ子構造」を取り入れた授業を行ってきた。教育指導手法の基盤となる理論を身につけ自分自身の教育活動を進めていくことで学生の活動も意欲も高まったのではないかと感じられる（学生の意見及び感想参照）。

Abstract

Firstly, in engaging in educational activities as a teacher, I considered the importance of collaboration among educators (collegiality) and relationships with students, emphasizing the significance of dialogue. To this end, I incorporated the method of “philosophical dialogue” into my teaching approach. Furthermore, I focused on the tendency to rely on methods I had personally learned and developed over time. By conducting surveys and referencing the results, I incorporated topics that students wished to learn, aiming to create lessons where they could apply their learning and recognize its value. With this in mind, I employed a “nested structure” in my lessons to enhance their practical relevance. By grounding my educational practices in theoretical foundations and advancing my own teaching activities, I believe I was able to enhance students’ motivation and engagement (as evidenced by their feedback and reflections) .

0. 授業「内容」に入る前に

本学において「教育方法論」を担当させていただいて6年目になるが、毎年強く感じていることがある。

それは、「議論好きだが対話ができない」学生が多いということである。分かりやすくいうと、議論をして自分の考えが他人の考えよりも優れていることを示すために、他人を黙らせ他人の考えを潰そうとすることを自然としてしまう学生がいること、そのような議論になってしまうことを嫌って話し合うこと自体や自分の意見を述べることを避ける学生が多く見かけられることである。その状態で、グループワークを行うと、議論慣れした議論好きな人だけが意見を言うようになってしまう。それでは、多くの人が意見を出し合って話し合うことができず、多様な考えを聴くことも組み合わせることも、そこから新しい考えが出てくることもあり得ない。そこで、ひとり一人が、否定されることなく、自由に自分の考えを述べるという時間をとる形で「哲学対話」を取り入れてきた。取り入れた当初は、他人の意見を横から割り込んで黙らせ「なぜ議論してはいけないのか」という意見を言う学生もいた。しかし、自分個人の考える正解が「勝った」と思って満足してしまうことは好ましいことではない。教員となる人材が、そのような、多様性を認めないことはそれだけでも問題があるが、まして、VUCAの時代、既存の考え方では解決できない課題がたくさんある中で、それに対処するためには、多様な人がさまざまな考えを持ち寄って協働的に解決していくことが望まれる。そのような動きがとれるようにするためには、まず、「対話的に」ものごとを進めていくことは求められる。そこで、授業の初めの段階で、「哲学対話」の方法を身につけてもらい、その方法で話し合い語り合いながら知識や考えを掘り深めていくとともに、教育について考えながら、理論に基づいた教育実践力や教育手法を学んでいくような「入れ子構造」となった指導の進め方を試みてきた。

第1回終了後に、「哲学対話」を経験して感じたこと、考えたこと（一部授業全体の感想を含む）を記述してもらった。その内容を以下に示す。

- ・ 哲学対話では、「あなたにとって、いい教師とは」についていろいろ意見がでて、否定せず自分の経験に即して話すことで、他の人の話を聞いて「確かに」と思うことが多く、自分の意見が（変わったというよりかは）広がりました。
- ・ 哲学的対話は他人を否定しないで、ただ聞いてい

るだけでもいいという取り組みに対して斬新で魅力的なものだと非常に感心した。

- ・哲学対話はもちろんのこと、ZOOMを用いて話し合うことが初めてであったので、しゃべりにくさが余計あり、難しかった。
- ・初めて哲学対話というものをやってみて、「否定しない」という考えは大切なことだと感じた。
- ・哲学対話というものがあり、知識ではなく自分の経験に即して話すという対話の仕方があるという事を初めて学んだ。また、相手の意見を否定的な態度をとらないという事が円滑なコミュニケーションをするうえで大切だなと感じた。
- ・ルールを決めて会話、対話することは新鮮でした。また、自分の意見を述べるだけでなく、否定せずに会話を広げるというのが面白かったです。一方で、対話かつ否定をされないという前提の上でも、自分の意見が周りとは外れていると積極的に発言するのが躊躇われました。しみついてしまった感覚なのかと思ったため、学校の環境では生徒に周りとは意見が異なっても良いという感覚を慣れさせることも大切なのではないかと感じました。
- ・対話の中で、自分が目指す教師像について考えることができた。他の人の理想の教師像も聞いたので、今日話し合ったことを今後の授業や教育実習にも活かしていきたい。
- ・初めて意識して哲学対話をしたのですが、よく教職系の授業中でやるディベートやグループディスカッションとはまた違ってなかなかスムーズにいかなかった。
- ・「教育方法論」と聞いて、少し堅い授業を想像していたが、「哲学対話」という自由な手法を使っただけで話し合いは受け入れやすかった。結論を出す必要は無いという前提の下での話し合いは、焦りに駆られることがないため、発言しやすい穏やかな雰囲気の良いと思った。
- ・今回の授業では哲学対話を意識して対話を行いました。知識ではなく自分の経験に即して話すという点が意外と難しく感じました。私たちの班では「学校教育でつきたい力」について対話を行いました。授業やネットなどでの情報を基に普段話すことが多く、自分の経験に即した意見を述べようとすると、意外と考えがまとまらず、難しかったと感じました。このことから自分自身が普段、いかに他人の意見に影響を受けていたのかを知り、他人の意見ではなく、自分自身がどのような経験をし、それに対してどのような考えを持っているのかという自分の意見を持つことが非常に重要であることを理解できました。

- ・哲学対話はとても今日意味深いものだと感じた。ただの会話とは違い、意見知識が広がる会話になった。
- ・グループワークを通じて自分にはなかった考えや意見に触れることができたのでとても刺激を受けました。また考えるとはどういうことかについて学ぶことができただけでなく、「哲学対話」という新たな知識に触れることができたのでとても実りのある時間になったと思います。
- ・同じ教職課程を目指す人としてみんなそれぞれの意見があったため、新たな視点からの学びを得られた。ただの意見交換ではなく哲学対話だったため自分の意見に自信をもって発言することができた。
- ・今回の授業で哲学対話について理解して少し実践することができてよかった。「対等に話をするために自由を制限→「知識ではなく自分の経験に即して話す」」をよんで実際に自分の経験に即して考えると、自分の考えに説得力が増したように感じた。また、「人の言うことに対して否定的な態度をとらない」より自分の経験に即して意見を言うことは少し恥ずかしさがあったが、否定的な態度を取られないことの確証があると自信をもって意見を積極的に言えるようになったと感じた。「分からなくなってもいい」はもっとも哲学的なルール…」より過去の話し合いを思い返してみると話し合いの中で自分の意見を見失ってしまうこともあったが、今回の哲学対話ではわからなくなってもいいと新たな視点で話し合いができたのは新鮮で面白かった。
- ・哲学対話をできてよかったが、時間が少なかったのが惜しかったように思う。しかし、自己紹介をして一人一人の意見を言うだけで終わってしまい、否定する暇もなかったのでこれはこれでよかったかもしれない。
- ・「哲学対話」というのは、はじめて聞いたが、その中でも「知識ではなく自分の経験に即して話す」というところが興味深かった。
- ・哲学対話という言葉を経験した。この哲学対話においては、人の言うことに否定的な態度を、自分の経験について話すということを経験した。
- ・学びとなったことは、哲学対話の中で、「教員免許を持っていれば授業は教えられるし、勉強を教えることはマストだけど、その他の点（生活指導）で熱心な先生の方はいい教師だなーと感じていた」という意見があって、私も思い返して、確かにそうだったと気づくことが出来た。

- ・議論ではなく対話の重要性について学んだ。
- ・自分は普段積極的に自分の話をするタイプではなく、どちらかというと聞き手に回ることが多いので、いつも話に参加しなければという焦りを感じているが、哲学対話のルールからそのようなことは考える必要がないことを学べ、気持ちが楽になった。
- ・「哲学対話」本当によいと思います。特に私は自己肯定感が低いので、「どうせ私が考えることはたかが知れている」「間違っているに違いない」と考えを放棄する傾向にある。(授業中発言もしたくない)つまり間違えることにある種の恐怖を感じている。(同じように思う人も多いと思う)。哲学対話：否定されない場であるので、自由に話しているうちに、自分でも思っていなかったことを言ったりして自分でも驚きました。一人でも思考の壁打ちをできることを最終目標に授業をがんばってみようと思います。
- ・「哲学対話」が生徒と接する上で必要なことであること。
- ・対話のルール
- ・哲学対話のような話を聞いて受け入れることは、教師になるうえでの必要な能力であるということ。
- ・自分のグループでの哲学対話では発言してくれる人が偏っていて、聞くだけでも良いという反面、全員でコミュニケーションを取り辛くてむずかしかった。
- ・哲学対話で「経験に即して話す」ことが、対等に話することに活きるというのが面白いと思いました。
- ・教育に関してたくさんの意見、知識を吸収できた。さらに哲学対話という言葉も知れた。知識ではなく、自分の経験に即して話すのはおもしろいと思った。
- ・「対話」と「議論」の違いを知れたことだと思いました。私はあまり人の意見に対して否定などをしたくないのでいつも「対話」のような話をしてしまっていると思うのですが、「議論」をしている人にとっては私の「対話」のような話し方は「議論」にはあってなくすれ違いが起こってしまうことが多々ありました。このことに今回の授業で気が付けました。
- ・哲学対話を実践の中で、知識ではなく、自分の経験に即して話すことを意識しながら、話すとき意外と自分の知識に即して話してしまっていることに気付くことができました。一方で、全員が哲学対話を意識することで、全員が話しやすい環境を築くことができると体感することができました。
- ・「哲学対話」という新しい知識を身に付けることができたことが最も大きな学びであったと思います。
- ・哲学対話という言葉自体を初めて聞いたので、まずその対話法を学べた。
- ・今回の授業の感想に似た部分が出て来ますが、今回の授業では哲学対話で決まった題材の根底にある本質を見抜くことを目的にみんなで話し合うことができて学びが多かった。色々な意見から結論を出すのは複雑化したことで難しかったが、柔軟な思考が必要だと学ぶことができた。何がいいかと思うのには個々の価値観や経験に基づいているのでそれらを疑問視するとまた新たな話題が生まれさらに話に深みが出ることも学べた。
- ・哲学対話を実践し、そのルールから多くのことを学ぶことができました。対話を通して相手と自分に対する理解を深め、自由な思考を促すことができることがわかりました。これらのルールがたくさんに組み合わせることで思考を促す環境を作り出すことにつながっていることを学びました。
- ・哲学対話で学んだような、否定的な態度をとらないという部分
- ・「哲学対話」は参加者の主体性や実践知を高める点において有効な方法だと感じた。主体性にでも、受動的にでも「考える」ことを大切にすべき。
- ・ブレイクアウトルームで行った議論で、「こんな授業をしたい、してほしい」を話し合ったが、みんなの意見を知れた。そこで、私は教員も生徒も達成感、充実感を得られる授業をしたいと考えていたが、みんながそれを肯定してくれて、これが哲学対話なのかなと学ぶことができた。

1. 第1回授業終了時のアンケートから…「授業における希望は何か」「どのような授業を期待するのか」

毎年、第1講義において、以下にあるようなアンケートを取り、2回目以降の授業の進め方に活かしてきた。今年度も同様に進めた。そのアンケート結果(n=43、複数回答)とその選択理由は下の通りであった。

サンプル数が少ないためあくまでも数値は参考程度のものとなるが、選択理由は参考にできると判断した。

-
- ① 期待なんて特にしていない。
 - ② アクティブラーニングとして使える手法を身につけること。
 - ③ 生徒に接する方法や心構えを身につけられること。
 - ④ ICTの利用の実態や利用方法を知ることができること。

⑤ 教員になる方法（教員採用試験など）の実際や対策を知ることができること。

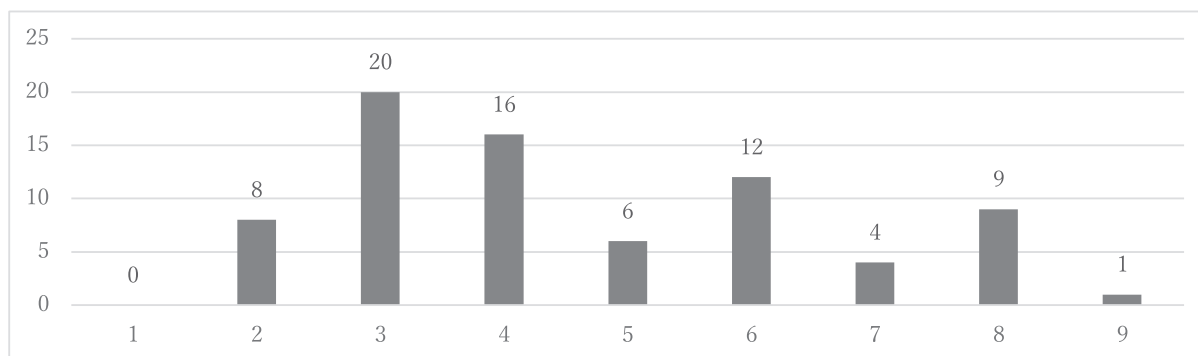
⑥ 教員の労働環境などを知ることができること。

⑦ 公立と私学との違いを詳しくきくことができるこ

と。

⑧ 教育の理論と現場を結び付ける学びができること。

⑨ その他



（図1）授業当初アンケート 2024 年度版

- ・ 教員として重要だと思うので、ICTは私の学生のとときにはあまり利用していなかったのですが、正直、ICTを利用しながら授業を行うことに前向きではないですが、推奨されているので実態や利用方法は知りたい。公立出身なので私学の特徴や違いを知りたい。
- ・ ICTの利用の実態や利用方法を知ることができること
- ・ 周りの方と話し合うことで自分の視野も広げて行きたいです。
- ・ 今後の授業形態の基本としてICTを用いていくと思うから。
- ・ 生徒が成績にとらわれずに、楽しく意欲的に勉強できるようになる接し方や、言葉遣いを知りたいです。
- ・ 藤牧先生は多くの種類の教員免許を所有しており、公立中学校・高校、私立中学校・高校、特別支援学校など様々な学校で教員をしていらっしやうと分かったので、そこでのお話が聞きたいと考えた。
- ・ これまでは生徒として生きてきた中で、先生としての心構えや接し方、また教育現場の教師視点の実態を学びたいと思いました。
- ・ 自分の教育目的、教育目標を確立させるためにいろいろな教育に関する考え方を教えてほしい。また、それについて考える機会が欲しい。
- ・ 先生が複数の教員免許を持っていることから各科目に対する免許取得までのプロセスや教員となった後の実態を深く知られている方だと思うのでその辺りに期待させていただきたいと思っています。
- ・ 教員になる方法や対策、公立と私立の違い、です。

特に公立、私立の違いは生徒目線での違いは志望校を選ぶ際などでなんとなくわかっているのですが、教員目線での違いが非常に気になります。

- ・ 教員になるかどうかまだ迷っているため、教員になる前の判断材料として活かせる内容を学びたい。特に労働環境について詳しく知りたい。
- ・ 教育者になるかならないかはわかりませんが、組織の中で動く上で役立つ力を養えたらと思います。
- ・ 私は様々な人が様々な意見を言い合うことが良いのかなと思っているため選びました。その中で自分とは意見が異なる人が出てくるのかなと思うため、まとまらなくても出てきた意見を共有するような形が良いと思います。
- ・ 実際に現場に立つときの心構えを学び、真剣に教師という職業の意義について考える時間にしたいです。
- ・ 近年、「ICT教育」という言葉をよく聞くが、ICTを使ったからといって今までの教育より良くなったとは一概には言えず、使い方によっては教育の質の低下になりかねない。そのため、本授業では、ICTの正しい効果的な利用方法を学びたいと考えております。
- ・ 理系なので、ICTについての知識もせっかくなら身に付けたい。まだ教師になるかどうかは迷っているが、なるときのことを考えて対策を知っておきたい。教員にしかわからない実際の労働環境について知るとは、将来教員になるかを考えるにあたって大切だと思う。私は公立にしか通ったことがなく、私立のことについてほとんど知らないのに興味がある。
- ・ 現代の教育現場ではICTを活用した教育が推奨さ

れ始めており、尚且つ ICT を積極的に取り入れている学校も数多くあるので、実際に自身が教育に携わったときに滞りなく活用できるように学びたいと思っています。

- ・私は中学校教育における AI リテラシーに強い関心を持っています。現在、個人的に文部科学省でのインターンや、学校の授業見学を行っておりますが、GIGA スクール構想がどれくらい浸透し、現場でどのように活用されているのかは、まだ把握できていない部分があります。この授業を通して、幅広い ICT 活用の実態を知り、それを今後の研究に役立てたいと考えています。
- ・講義名にも ICT 含むと書いてあったので ICT を活かした授業方法を身に付けられることを期待しています。また講義名が教育方法論であることから、教師の一人として生徒たちと関わっていく中での生徒との接し方や、生徒と接するうえでの心構えを身に付けられることを期待しています。
- ・教員になるには座学での受け身の体制では立ち向かえないと思っています。そこで実際に教育実習をはじめとした実践学習が必要であると考えます。そのために番号に挙げたような現代の教育に結びつくような学びができることを期待します。ICT 活用は現代の教育現場で不可欠であり、様々な手法を身に着けたうえで利用ではなく活用できたいなと思っています。
- ・これから行うであろう教育実習や介護等体験で実際に生徒と関わる時に生徒とどのように関わればよいのか学びたいと思っています。今までの教職の授業では模擬授業などで私たち同じ大学生が生徒役となり模擬の授業を行ってきたが、実際の生徒を前にすると、同じ教職を学んでいる大学生の前で授業をするときに比べてやりにくいだろう。そんな時の心構えを学べたらと思っている。同じ教職を取っている生徒同士でも生徒に対してどんな気持ち構えであるか話を聞きあって学びを深めたいとも思っている。
- ・今まで習ってきた教員職についての学びを深めるとともに、教員職につながるような ICT の学びなども深めたい
- ・教員の労働環境を知ること、世の中で教員を目指していると発言すると素晴らしい職業だと評価されることよりもやめたほうがいい、ブラックだと否定的な意見が多いので具体的に生徒側からは見えなかった教員の労働はどのようなものなのか知りたいです。
- ・アクティブラーニングについてはもちろん、実践的な授業方法を学びたい。教師のリアルを知りたい。

い。

- ・自分自身が受けてきた教育は ICT が利用されていたため、便利さなどは理解しています。しかし、先生側の視点で気をつけるべきポイントや心構え、機器でできるおすすめの機能などがあれば教えていただきたいと思っています。
- ・教育の理論について詳しく学び、現場で生かしたいと考えている。
- ・ICT を含め、生徒の理解や成長が効率よく進むような方法・工夫について学び、人に上手く伝えることや学びを深めることに活かしたいから。また、大学の授業で学んだことを、教育実習等の現場で実践できるような能力を少しでも身に付けたい。
- ・ICT 活用のための授業なのだから、それについて学びたい。
- ・ICT というワードをここ最近聞くようになり、実際の現場においてどのように使われているのか知りたい
- ・私は教員を目指しているわけではなく、スポーツの指導者を目指している。その過程で教員免許を取り、教育現場、子供への接し方などを学びたく教職課程を取っている。

上記アンケート結果に合わせて、事前に示している詳細なシラバス（下図参照）の予定を変更して進めることになった。このことは毎年のものであるが、進める順番や組み立て方は変更があっても、コンテンツに関しては省略することではなく、あくまでも組み立て方や提示する順番を変えているだけである。

2. 授業開始当初の学生の意識

中等教育（主に中学校、高等学校）における教員とは、教育実践に意識、理論、実践技術など必要なさまざまな力を兼ね備えることを求められる。この「教育方法論」は、その教員となるための設定科目であるから、それらの力を養うことに寄与するものであることが求められると考えて計画し、進めてきた（シラバスの内容参照）。

受講開始当初、講義より説明を受けることが「学ぶ方法」であると捉えている学生が多かった（毎年同じ様子である）。そのことから、この授業に参加している学生自身の中等教育段階（特に高等学校）における学習が「受け身」であったことが想像される。そこで、担当した初めの頃には、学生の希望や意識に合わせて講義型授業を行ったこともあった。教育に関する知識に関しては、まとまった書籍を紹介したり、スライドやK P 法を用いてまとめたものを示してレジメを配付

藤牧 朗

開講時期：秋学期授業/Fall

その他属性：

【授業の概要と目的（何を学ぶか）】

教育の方法及び技術についての基礎的な概念、考え方や活用法を学ぶとともに、それらの知識・技能をもとに資質・能力を育成するための単元指導計画を作成する。

【到達目標】

資質・能力の育成をめざして、周りの人と協力し、教育の方法及び技術、情報機器及び教材の活用に関する基礎的な知識・技能を身に付けるとともに、単元指導計画を効果的に作成することができる。

【この授業を履修することで学部等のディプロマポリシーに示されたどの能力を習得することができるか（該当授業科目と学位授与方針に明示された学習成果との関連）】

ディプロマポリシーのうち、「DP2」と「DP4」に関連

【授業の進め方と方法】

基本的に、対話的で協働的な授業（アクティブラーニング型授業）を進めていきます。

座席の移動を伴うグループ活動や身体的な活動、授業内での対話などが毎授業にあります。また、毎授業のグループによる議論やまとめ及び課題などは ICT 機器を用いて行います。

自己評価を含む課題も原則的に毎回出しますので期限内に遅れないように提出してください（期限内に遅れた提出物は評価できません）。毎回の課題（書籍を読む、調べるなど）があります。そこをしっかりと積み重ねることが必須です。

「主体的・対話的で深い学び」に連なるさまざまな授業を体験し、その意義に気づき、ひとり一人が自分に適した学び方及び授業方法を確立できるように努めます。

授業を中心とした学校現場における広くさまざまな教育方法について、理論に基いて理解した上で、さまざまな授業方法を疑似体験できるような時間をつくり、各自が考え、グループで議論し適当と考えられる方法を選択し、授業づくりを行います。

主体的に学ぶこと、対話的に学ぶこと、そしてそれによって“学び”が変わり深くなることを体験していきます。

授業終了後の課題そのプリント内容に関して次の授業時にできるだけコメントを加え、さらにそこにある意見に基づいて授業展開を臨機応変に変化させていきます。そのことが、後の皆さんの教育活動そのものに役に立つように考えています。そのため、授業の順序が予定とは変わるものと考えておいてください。

14 回の授業の 3 割程度をオンライン形式（Zoom 利用）とすることで、オンライン利用の授業方法にも対応できることを考えています。必要に応じて、外部の教育実践者からのお話も入れる予定です。全体として「入れ子構造」となった授業としていきます。

【アクティブラーニング（グループディスカッション、ディベート等）の実施】あり / Yes

【フィールドワーク（学外での実習等）の実施】

なし / No

【授業計画】 授業形態：対面/face to face

回	テーマ	内容
第 1 回	オリエンテーション	アイスブレイクの方法
オンライン /online	(授業における ICT 利用方法及び意義を含む)	自分たちが受けてきた教育の振り返りについて「哲学対話」を用いておこなう（対話、構想まとめ及び提示に ICT 利用）
第 2 回	情報通信技術 (ICT)	教育方法論を通して何を学ぶかに
対面/face to face	を用いた教育方法と教師の専門性	について「哲学対話」を用いていっしょに考える（対話、構想まとめ及び提示に ICT 利用）
第 3 回	教育方法の基礎的理論、情報通信技術 (ICT) の活用の意義と理論	「教育とは何か」について「哲学対話」によって改めて考える（対話、構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		

第 4 回	新しい学習指導要領と教育方法～知識基盤社会と社会構成主義、情報通信技術の活用 (ICT 利用を含む)	教育課程で目指しているものと教育方法を関連付けて学ぶ（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
オンライン /online		
第 5 回	教育の内容と学習活動 (ICT 利用を含む)	「教えて考えさせる授業」の考え方を理解し、実際に体験する（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 6 回	学習活動と学習環境、教育方法と情報活用能力 (ICT 利用を含む)	協調学習（ジグソー法）の考え方を理解し、実際に体験する（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 7 回	教育目標の明確化と授業のデザイン (ICT 利用を含む)	「学びの共同体」の考え方を理解し、実際に体験する（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 8 回	個に応じた指導の工夫と情報通信技術 (ICT) の利用可能性	「学び合い」の考え方を理解し、実際に体験する（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 9 回	主体的・対話的で深い学び (ICT 利用を含む)	演劇的手法を取り入れた授業の考え方を理解し、実際に体験する「身体活動が思考を深める」ことを認識する（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 10 回	学力と評価の観点～「指導と評価の一体化」とルーブリックの利用 (ICT 利用を含む)	ルーブリックを作成・使用中で「学力とは何か」を考え、評価とはどのようにあるべきかを考える
対面/face to face		
第 11 回	「個別最適な学び」と情報機器 (ICT) 及び教材の実践的活用	KP 法及び ICT 機器利用の場合の授業展開の実際を比較して考える
対面/face to face		
第 12 回	個に応じた生徒指導などの指導技術の工夫 (ICT 利用を含む)	さまざまな場面での生徒とのかかわりについて考える（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		
第 13 回	教育評価～情報技術を利用した 3 観点に応じたルーブリックを用いて (ICT 利用を含む)	各授業（案）による実践に対する 3 観点評価による個別の実践と評価を行う（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
オンライン /online		
第 14 回	授業のまとめ (ICT 利用を含む)、テスト	授業のデザインの中での反省と評価（構想まとめ及び提示に ICT 利用）
対面/face to face		

【授業時間外の学習（準備学習・復習・宿題等）】

【本授業の準備・復習等の授業時間外学習は、4 時間を標準とする】
・毎授業時の小課題（自己評価を含む）について考え記述提出する。
・授業の中で言及された書籍及び論文を読む。
・学習指導案作成課題及び発表（相互評価を含む）を行う。
☆上記のことは必須。必ず必要なものは読み記述し発言し身につけて進めるように努めること。

【テキスト（教科書）】

梶谷真司「考えるとはどういうことか」幻冬舎新書、2018 (840 円＋税)
渡部淳「アクティブ・ラーニングとは何か」岩波新書、2020 (800 円＋税)

藤牧朗「“深い学び”を促すアクティブラーニング型授業と評価を考える」法政大学教職課程年報 Vol.20、2022

藤牧朗「高校 1 年物理基礎指導を通し、中高一貫校で学ぶ意義を考える」法政大学教職課程年報 Vol.21、2023

【参考書】

文部科学省「中学校学習指導要領」「高等学校学習指導要領」（最新版）
溝上慎一「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」東信堂、2014

奈須正裕「資質・能力と学びのメカニズム」東洋館出版社、2017
秋田喜代美・佐藤学「新しい時代の教職入門」（改訂版）有斐閣、2015

したりしてみたが、こちらからの一方的な講義が始まると眠ってしまうものも出てきてしまい、知識定着率は高いとは言えず、授業効率が悪いものではなかったと推測された。

そこで、平均して毎授業の半分以上の時間を学生同士が活動する（考える、話し合う、発表し合う）時間として組み立ててきた。そうすることで、自分自身で考え、学生同士が語り合うことにより、そこから新しい考えや一段階上の思考ができることに学生自身が自分で気づくことを期待した。

このことは、受講生が実際に教員となったときに、どのような授業を実践するようになるのかということに大きな影響を与えるものと考えられる。自分が体験していないことを実践することは非常に難しいことと考えられるからである。この担当授業においては、「入れ子構造」としての授業を意識している。そして、ここでの「学んだこと」、「学び方」、「授業方法」、「教育に対する考え方」が学ぶだけでなく、学生がそれぞれに身につけて自分の実践において生かしていけるようにできるようになることを目指している。

- ・ 教師は授業を教えることが主な業務のように感じるが、良い教師像について考えてみると人柄や生徒へのかかわり方の方が重視されているように感じた。
- ・ グループディスカッションの内容について先生が1度は考えることであったので、どの内容も他の人の考えを知りたいと思いました。私の班はテーマが「学校教育でつきたい力」であり、同い年がたくさんいるからこそ身に付けられる、コミュニケーションや勉強意欲、人付き合いなどが出ており、勉強意欲は自分では思いつかなかったことだったので、視野が広がりました。
- ・ これからの授業の流れや雰囲気がよく分かった。
- ・ グループワークを交えた授業で面白かった。手書きのスライドを使用していて、斬新だなと思った。
- ・ 今回はどんな授業なのか、先生の自己紹介の二点で多くの時間を占めましたが、教員になりたいと思っている人に合わせた授業をするとおっしゃっていてそれが本当にあるべき授業のあり方だなと先生の説明を受けて感じました。
- ・ “勉強”をさせるような教師にはなりたくないな～と思いました。もし私が教師になったら、今回の授業のように対話によって学生の意欲を高め、成長を促すような授業を行いたいと思います。
- ・ 先生が可愛くて素敵だと思いました。
- ・ 今回の授業の中で、「問いがあつてはじめて思考が動き出す」という言葉が最も印象に残った。言わ

れてみれば当たり前のことだが、今まで面と向かって考えたことはなかった。改めて、疑問を持ち、その疑問を知識に変えるために自分で探求していくことは大切だと実感したとともに、大学という、自分の興味あるものを掘り下げたり、将来のことについて考えたりする場所において最も大切なことなのではないかと感じた。これからは、色々なものについて触れ、問いを持ち、探求していくことを大切にしていきたいと思う。

- ・ 今回の授業では zoom で話し合いしましたが zoom なのかいまいち議論の運びが遅かったです。また zoom での話し合いはグループごとや生徒全体の話し合いの進みが把握しにくいので教師視点で考えるとグループの話し合いにはあまり適さないのではないかと思います。
- ・ 他の人との対話は自分の考え以外の考えも知れるため、幅広い視点を持つうえでとても有効と感じた。
- ・ ガイダンスのような内容であったが、グループディスカッションもでき、他のガイダンスの授業より充実したものであった。
- ・ 話し合いの時間が短くまとまりづらかった。しかし、意見をきくとほぼ同じだったけれど、その人の実体験がみえて面白かった。
- ・ ガイダンスとして、この授業の意図や先生の経験などを知ることができ、先生の豊富な経験を生かした授業を受講できると思い嬉しく思う。一方で、全体の進行がスムーズでなく、「哲学対話」の時間が短いため十分に体験できなかったことは残念に思う。今回の哲学対話はあくまで体験だが、実際に1サイクルを行うには10分以上は必要ではないかと思う。
- ・ 今回は導入ということで、「授業」という学びは特になかったと感じる。5 個の設問について、発表を通して様々な意見が知れた。グループワークにおいては、良い授業とは何か、という設問に対して『達成感』を感じる授業が良いと思う』との意見が挙がった。自身とは違った別角度からの意見で面白く感じた。
- ・ 理想の教師は生徒のやる気を出させるような人だと学んだ。
- ・ 対話したテーマについて、他の人の意見を聞いて、そういう考え方もあるのかと学びを得ることが出来た。
- ・ 周りとの意見が違ふことに対して、ひるまずに発信していくこと。
- ・ 自分のなりたい先生像を考えることができた。
- ・ それぞれが考える理想の教師像を知れました。ま



た、その厳しさも学べました。

- ・自分の体験から意見を述べることの重要性
- ・今回、私はグループワークで「こんな授業をしたい、してほしい」という話題について話し合った。私は「生徒が楽しいと思える授業が良い」と考えたが、班員の中に「教員自身も楽しめる授業が良い」という意見を述べている人がいた。私はこれを聞いて、とても素敵なことだなと思った。教員が楽しそうに授業をすれば生徒も一緒に楽しんで授業を聞いてくれると思うし、それで授業（教室）に笑顔が増えると自然と良い雰囲気や教師と生徒の関係（距離感）、学びに対する向上心が築いていけるなと思ったからだ。また、これは普段の人間関係においても同じことが言えると思った。自分が楽しむと周りの人も楽しい気持ちになってくれると思うので、これからは周りの人を笑顔にさせようと思うのではなく、自分が楽しもうと思って過ごしていきたいと感じた。
- ・グループディスカッションの際、みんなが一つずつ意見を出さす前に、グループとしてどのような方向性を前提にするかを提示すると話し合いが活性化した気がする。
- ・必ずしも教える側の達成感と生徒側の達成感が一致するとは限らないこと
- ・授業で最も学んでいるのは「先生」であり、これを授業で最も学んでいるのを「生徒」にしなくてはならない、という言葉は学びとなった。教える側が最も学ぶ立場にいるというのはわかっているつもりだったが、見落としていた。生徒が最も学べる環境にできるように授業を展開できるようになりたいと思った。
- ・自分が教員になって身に着けたいことは何なのかを考えることが出来ました。

上記に示したように、「哲学対話」から始めていくことによって、学生は自分の意見を自然体で発言できるようになっている様子がはっきりとかがえる。当初の遠慮したような、あるいは話しにくいような状況はほぼ観られなくなり、全員が自分の考えや意見を語る姿がみられた。毎回のようグループワークを行い、そのために座席の移動を行うが、学生皆が素早く移動を行うことができています。また一つの授業時間中にグループ編成を変えることもあったが、それも時間を無駄に使うことなく移動ができ、その授業時間における学びを拡げたり深めたりすることができたと感じられる。

授業開始当初には、学生たちは授業担当である先生すなわち「ぼく＝藤牧」に対して、批判的に視ることはできてもあくまで客観的かつ『他人ごと』であったものが、次第に自分ごととして『私ならどうしよう』という『見方、考え方』ができるようになってきたと考えられる。このことは、現場で活躍する教員となるにあたって重要なところであり、「入れ子構造」の学びの効果が出てきているといえよう。

また、授業内容の関係で、こちらからの説明講義中心の授業となってしまうときがあったが、そのときの授業後の課題における意見や感想をみると、学生が語り合う時間が少ないことへの批判的意見が多くみられるようになった。このことは、考えたりそれに基づいて意見を述べたりすること——すなわち授業における主体が学ぶ側の人（学生や生徒）であることに気が付いたということであると考えられる。そして、学びを拡げ深めるためには、受け身ではなく、学ぶ人自身が自分たちで学ばなければいけない、その方がたのしいということに気づいたことに他ならない。このことにより、この学生の皆さんが実際に教員として教室で授業などを担当するようになった時には、生徒が「主体的・対話的」に学ぶような場創りをできるようになると期待できると考えられる。

3. 授業後半の学生の意識 ～「受け身」からの変化

4. 授業への満足度と改善点——2024 年度学生の感想から

- ・ 国語力の低下等の話題はネットニュースや巷で耳に挟んだことがもちろんあったが、この授業で記事を読み学ぶことができて大変有意義であったと感じた。また、自分のみであると偏った見方になりがちな話題でも、グループワークを通すことで新たな視点を手に入れ、自分の解釈以上に納得する意見と出会うことができることも感じられた。発表に慣れること、自主性を養うことももちろんアクティブラーニングにおいては重要で、更に他人の言葉により自分の世界を広げることができる多様性を身をもって体験できた。
- ・ 自分が印象に残っているのは、班での指導案発表で時間が余った際に話題になった今回の授業案における ICT 機器の活用についての悩みです。自分がこの授業案で使うアクティブラーニングが、「学び合い」だったのだが、ICT 機器の使い所がなかなか見つからなかったという相談を持ちかけたのだがそれに対して、自分が思い浮かべないような使い方をしていたのが非常に印象に残っている。
- ・ この教育方法論という授業を通して、教科法ではなく中高生の色々な力の強化法について体得し、アクティブラーニング等を通じた深い学びについて知識や理解を深めることができたと思う。これまでの授業の中ではアイスブレイクやグループワーク、zoom(オンライン)等複数の方法があったり、不手際により進行が遅くなったりすることがあったが、実際に集団生活でも起こりうることで知ることができ、また他者との交流の機会が多かったことから、インプット・アウトプットを重ねながら参加、習得することができて良かったと思う。
- ・ 国語力の低下に関して、ものすごく共感できたし、大事な問題であると感じた。それは、自分たちの世代からもこの国語力の低下は話題に出ていて、その自分たちの世代が教師の立場になったとき、生徒に対してしっかりと注意ができるのかと不安を感じたためである。なので、自分の語彙や表現をしっかりと見直し、不完全でないように心がけたいと思った。
- ・ 他の人の発表を聞くことで自分自身の発表の中の軸をはっきりすることの大切さを痛感した。どんな生徒になってほしいか、そのためにどのようなアクティブラーニングを使い、どのような狙いで持っていくのかなど詳細に考えれば考えるほど、わくわくする。このように授業に満点はないこと

を再認識し、軸をもって生徒を導くべき方向に行かせてあげられるような先生になりたいと思った。また、評価基準も軸が明確になっており、かなり採点がしやすくなったと感じた。軸を自己の中で終わらせず、他人の目にまでもさらすことで公正な評価ができると感じた。軸をもって、客観視することを忘れずに評価、発表をしていきたい。

- ・ 半期授業ありがとうございました。私は授業の中でアクティブラーニングとは何かを学んでいく中で、なぜこの教育が求められているかということに関して、非常に試行錯誤することができました。特に私の授業内容を踏まえて探求した結果、Society 5.0 で提示されたこれからの人材育成に求められることや、文部科学省の学習指導要領の改訂の経緯などを読んだ結果、この授業でアクティブラーニングを体感することの価値を強く認識することができました。また私自身も on-line 上で話すことが非常に苦手で抵抗があったのですが、授業内で on-line での講話をさせていただいたことで、少し自身をつけることができました。本当に貴重な機会をありがとうございます。またアクティブラーニングを複数学ぶことで、今まで試行錯誤してこなかったグループの人数による効果の違いや、机の形などに対してしっかりとデザインして授業を行いたいと感じました。また私は、文章ベースでの言語化が非常に苦手であり、一回プレゼンのような形で作成して、それを文章に落とし込んだ方が人にわかる説明になることを授業内のグループワークの中で、見出すことができました。1 月には高校の授業内でキャリアに関する講演を行うので、そこでアクティブラーニングを体現していきたいと思います！！またまだ何も教育に貢献できていないので、大学生のうちに AI の教材開発やり切って、少しでも貢献できるよう努力します。
- ・ 哲学対話の存在を知ただけでも、今回の授業をとった甲斐があったと感じる。また、アクティブラーニングの手法に関しても、今までに体系立てて学ぶ機会にはなかった。前学期に履修した、理科教育法でも時間の関係から一部しか扱っていないのが現状であったため、非常に勉強になることが多かった。(分かっているようでわからない点が多かった)
- ・ 先生は“勉強”という言葉を受験が控える時期まで使わないというお話を、授業の最初に説明されていました。授業案においても、“勉強”という字面を想起させないような学年の授業を想定することもできましたが、私はあえて高校 3 年生の授業を扱うことに決めました。私の授業案の効果（受

験の成績を含む) がどれだけのものであるのかはわかりませんが、アクティブラーニング手法に対して当初抱いていた不安の大部分は杞憂であることがわかりました。これからも学ぶ手間を惜まずに、授業で登場した方々の様々な本などを読んで、理解していきたいと思いました。(話は変わりますが、冬休みにラドン温泉に行く予定です。)

- ・ 教師の労働環境についての話題が最も印象に残っている。なぜなら、教師のやる気があっても、その過重な労働のせいで、教育がうまくいかなかったり、教師自身を傷つけかねない状況であり、危機感を覚えたからである。しかし、政府がもっと動かなければ状況は改善しないので、社会全体の意識を高める必要があると思った。
- ・ 前回の発表の際にもらったフィードバックを元に改善した発表を今回したが、より良い発表になったと実感した。やはり、自分自身の考えのみで作ったのだと、偏りや気づかない点など多くあると思った。他の人から意見をもらうことで、多様な視点からの意見をもらうことができ、よりよいものになっていくと身をもって感じた。他者の意見を柔軟に取り入れることや、しっかりと否定をせず対話を行うことが大切であると感じた。
- ・ 授業案の作製など、回を重ねるごとに、改善していきたいことやなるほどなど、思う事が増え、とても勉強になっているなど感じている。たとえ、教師にならなかったとしても人として大切なことも学ぶことが出来ているため、とても有意義な時間を過ごすことが出来ていると考える。

上記、今年度、学生の意見感想(上記提出課題内容による)をみると、授業における講義内容やグループワークなどの実践に関しては、満足度が高いようである。しかし、今年度は、外部の方に来ていただいて話をさせていただくことなどの時間がとれず、そこが非常に残念で申し訳なかったことでもある。逆に、学生の一人に外のセミナーで聴いてきたこと(ICT関連)を全体に語ってもらい、そこからグループワークで深めていく時間をとったことは次年度以降の参考になることである。

これから担当するときには、さらに ICT の利用に関して、こちらから複数の具体的な利用方法を提示して、教育の個別最適化についても考える時間をつくるとともに、学生の提案を訊いてとりいれたいと考えている。しかし、そのためには、授業時間が足りなくなる可能性があるため、いままです組み立ててきた内容を精査選別し、整理しなければいけないと感じるところでもある。

次世代を創る人財を育てるという価値とやりがいのある仕事といえる教員という職業が避けられるような時代の中で、学生の皆さんに「やってみようかな」「やってみたいな」と思えるような、そんな意欲と自信をどれだけ育んでくれることができたかどうかについて、精査するとともに、これからは、そのような力をいままです以上に養っていけるように努めていこうと考えている。

謝辞

学生の皆さんには、さまざまな参考になるご意見をいただきありがとうございました。毎年いただくご意見ご感想を基に次の年度の授業に改善に励んでいるのですが、今年いただいたご意見ご感想も次以降の年度の授業に活かしていきたいと考えています。授業に積極的に授業に参加して下さったことと重ねてお礼を申し上げます。ありがとうございます。

【参考文献】

- ・ 石井英真『授業が変わる授業評価深化論』(図書文化) 2023
- ・ 梶谷真司『考えるとはどういうことか』(幻冬舎新書) 2018
- ・ 川嶋 直、皆川雅樹編著『アクティブラーニングに導く K P 法実践』(みくに出版) 2016
- ・ 藤牧 朗『“深い学び” を促す「アクティブラーニング型授業」と評価を考える～今年度の中等教育学校における実践を中心に～』(法政大学教職課程年報 Vol.20) 2022
- ・ 藤牧 朗『高校 1 年物理基礎指導を通し、中高一貫校で学び意義を考える～改訂された学習指導要領の理念を活かした学習指導～』(法政大学教職課程年報 Vol.21) 2023
- ・ 藤牧 朗『新科目『公共』の存在意義とその価値を活かす指導を考える～改定された学習指導要領の理念を活かした学習指導②～』(法政大学教職課程年報 Vol.22) 2024
- ・ 藤牧 朗『演劇的手法や KP 法、グループ学習を交え、授業の中に社会の場を作る』(Career Guidance Vol.414 / リクルート)
- ・ 溝上慎一『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』(東信堂) 2014
- ・ 渡部淳+獲得型教育研究会『学びを変えるドラマの手法』(旬報社) 2010
- ・ 渡部淳+獲得型教育研究会『AL 型授業が活性化させる参加型アクティビティ入門』(学事出版) 2018
- ・ 渡部 淳『アクティブ・ラーニングとは何か』(岩波新書) 2020
- ・ 『高等学校学習指導要領』(文部科学省) 2018